2014年3月9日 受難節第一主日礼拝
説教　一粒の麦
ヨハネの福音書12章20-28節

【もうひとりの八重】

「一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのままです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます」(24)が、富士山麓 に立つ井深八重（1897-89）の墓に刻まれています。ハンセン病患者たちに「母にまさる母」と呼ばれた看護婦長。実り豊かな生涯でした。いったい何が井深八重にこのような多くの実を結ばせたのでしょうか。それは、イエス・キリストといっしょにいたからでした。

【イエス・キリストといっしょに】

「わたしに仕えるというのなら、その人はわたしについて来なさい」(26) は、福音書の中で、私たちが何度も何度も聞く主イエスのあたたかい招きの言葉。ここではさらに、「わたしがいる所に、わたしに仕える者もいるべきです」(26)と。「あなたがいるところが、他にどこにあるというのか。ここしかないではないか。あなたは私とともにいるべき人なのだ」、そのように主イエスがおっしゃってくださる。

私たちはどうしたら信仰を全うすることができるでしょうか。その秘訣も主イエスといっしょにいることにあります。「一粒の麦がもし地に落ちて死」ぬとは十字架のこと。私たちには、神さまがわからなくなることがあります。神さまは本当にいるのか、私たちの人生にとって確かな望みが本当にあるのか、永遠の命と言うけれども、死後に本当に命があるのか、大きな試練にある時に、この悩みが本当に解決されるのか、と思うことがあります。けれども、その時に、一粒の麦が、もう地に落ちて死んで下さったのだ、と言うことを思い出す。イエス・キリストが、もうすでに、十字架にかかったことを思い出す。イエス・キリストが死んだ以上、もう豊かな実りが始まっているということを、覚えておく。忘れないでいる、忘れたら思い出す、思い出せない人には、他の人が思い出させてあげるのです。そうすれば、自分の中にある実りに気づくことができます。自分の為に命を捨てたイエス・キリストに足場をおく時、何が起こるか。私たちはキリストにとどまり、そして、豊かに実を結ぶのです。キリストの十字架は私たちに豊かに実を結ばせるのです。

【自分のいのちを憎む】

主イエスは厳しい言葉、意外に思えるような厳しい言葉を使われます。「自分のいのちを愛する者はそれを失い、この世でそのいのちを憎む者はそれを保って永遠のいのちに至るのです」(25)。主イエスといっしょにいるために一つだけたいせつなことがあります。それは、主イエスといっしょでないことを憎むこと。これがわかると、もうこの言葉は厳しすぎる言葉ではない。これは神さまの激しい愛の言葉。私たちをなくすことを何よりも痛みに思う神さまの愛の言葉なのです。「自分のいのちを憎む」というのはこの世のすべての楽しみを、あきらめるというようなことではない。そうではなくて、主イエスといっしょでいることをさまたげるような生き方を、憎むこと。憎んで離れること。

【いのちの君】

私たちはさまざまな苦難の中を通らされます。押しつぶされそうな苦難の中で、私たちはどのように耐える力を得ることができるのだろうか。「しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます」(24)。その力は十字架にあります。すでにその力は、私たちに注がれています。苦難はあっても、私たちには絶望はありません。すべての絶望はいのちの君が十字架で引き受けてくださったからです。このことをみんなが知ることが出来たらと願います。世界のすべての人々が。